

町内唯一の畳店

堀内

Horiuchi Teruo

輝雄さん



畳は今も健在

日 本の建築にはなくてはならない畳。その歴史は1300年といわれています。住宅様式の西洋化などで畳の注文は減り、町内で2軒あった畳店も現在1軒となりましたが、60年もの間、畳を製造している堀内輝雄さん（白樺町）に今回、お話を伺いました。

父は 職人仲間と共同で畳の仕事をしていたようで、札幌に2か所、当別に1か所の工場を持っていたようです。私たち家族は、昭和20年まで札幌帝国製麻会社の近くに（北7条東付近）住んでいましたが、空襲の危険があるので親戚のいる当別に疎開してきました。その後、父が復員し今の平出菓子店の隣で畳店の営業を始めました。私は当別高校の第1期生で、卒業してそのまま父の仕事を手伝いました。昭和39年に独立してその翌年に現在地に引っ越しました。昭和40

年代は建築ブームでね、その頃はアパートも床は畳が多かった。札幌からも職人が5、6人泊り込みで来てもらい、当時は手縫いだから、夜中まで残業して作ったものです。昭和53年には念願の有限会社にすることができました。

技術 は変わって今ではほとんどが機械縫いになってます。材料のいぐさは九州産が有名ですが、現在は7割が中国産。お客さんには国産を注文する方も多いんです。そして畳の芯は、断熱材のスタイロフォームが使われてとても軽くなった。畳の縁布には数十種類の色とデザインがあるんですが、これをきちっと縫い合わせるのが職人の仕事。畳を2枚合わせたとき、縁の模様を合わせるようにしたり、部屋の大きさが少しずつ違うため、畳のサイズを採寸して部屋にきちっと収まるような細かな調整が必要なのです。畳はほとんどがオー

ダーメイド。既製品で間に合わない部分があるため、職人が必要なんです。近年、町内のお寺の本堂新築に180枚を納めました。久しぶりに職人の応援も頼み、忙しかったですね。

後継者 ができたんですよ。それは次女の夫で、大手のハウスメーカーに勤めていたんですが、退社して手伝ってくれることになりました。小学生だった孫が作文で「大きくなったら畳屋になりたい。」と書いてくれた事もありましたが、現実に跡取りができたことはうれしいですね。畳は夏に座ると気持ちいいですよ。日本の気候風土に一番合っているからです。畳を張り替えた時、お客さんが「気持ち良くなりましたね。」と声をかけてくれるのがうれしいですよ。

仏間や客間で使われる畳敷。伝統の技術が受け継がれて良かったと思いました。取材で畳の良さを実感する1日でした。（2月8日取材）